

習慣文のアスペクト形式と意味解釈¹

—単純ル形とテイル形の対立を中心に—

鈴木 彩 香

1. はじめに

日本語では、習慣的な動作を表す際には単純ル形とテイル形の意味的対立が中和し、ほとんど同じ意味を表すものとして用いることができるとされている（工藤 1982, 1995 他）。

(1) 日本人はお米を食べる／食べている。

しかし、ル形とテイル形の対立が明らかになる (2) のような現象は、一見同じような意味を表すように思える (1) においても異なる意味解釈メカニズムが働いていることを示唆する。

(2) a. 日本人はお米を食べるものだ。

b. *日本人はお米を食べているものだ。

本稿では、習慣文の量化に関する先行研究の知見に基づき、(1) のようなル形習慣文には「個体の量化」が、テイル形習慣文には「イベントの量化」が関わっていると考えることで、(2) のような対立に説明が与えられると主張する。そして、上述の議論を通して、述語の状態性が文全体の量化のメカニズムに与える影響を明らかにする。

本稿の構成は以下の通りである。2 節では先行研究を概観し、日本語の習慣文を扱う上で、これまでの先行研究ではあまりル形とテイル形の対立は問題にされてこなかったこと、また習慣文に関する意味論的アプローチで指摘されているように、「個体の量化」と「イベントの量化」が区別されるべき意味解釈プロセスであることを見る。続く 3 節では、個体量化とイベント量化の違いを想定することで、日本語のル形習慣文とテイル形習慣文の対立が現れるいくつかの言語現象に説明が与えられることを論じる。その上で、4 節ではテイル形習慣文には状態性の観点から区別されるべき 2 種類があることを指摘する。5 節では全体のまとめと今後の課題について述べる。

2. 先行研究

本節では、日本語の習慣文に関する先行研究と、主に英語の習慣文を対象とした意味論的なアプローチによる先行研究のそれぞれを概観する。本稿では、ル形習慣文、テイル形習慣文という用語を便宜的に用い、非状態述語のル形、あるいはテイル形を用いて習慣的な意味を表す文であることを指すが、それぞれが表している「習慣」が異なるものであることを論じることが目的である。

2.1 日本語の習慣文に関する研究

日本語における習慣文の分析は、ル／テイル形のアスペクトを扱う包括的な研究の中で習慣を表すテイルに部分的に触れられることが多く、習慣文のみを中心的に扱う研究は少ない。特に、ル形とテイル形の対立からその性質を体系的に明らかにしようとする試みは極めて少なく、野田(2011)を除けば散発的な指摘にとどまるものがほとんどである。本稿では、習慣文においてもル形とテイル形には区別すべき意味解釈上の対立が存在すること、そしてその対立が状態性というアスペクトに基づくものであり、ル／テイルのアスペクト対立の体系性の中に位置づけられるものであることを主張する。

工藤(1982, 1995)では、習慣文は具体的かつ1回性のイベントを表す(4a)のような例と一般的かつ特性を表す(4c)のような例の中間に位置づけられており、(4b)のような例においてアスペクトの対立は中和するとされている。

(3) 時間的限定性

<具体的>—————1回性	【アスペクト対立有、テンス対立有】
↓	
<抽象的>—————反復性	【アスペクト対立中和、テンス対立有】
↓	
<一般的(超時)>——特性	【アスペクト対立無、テンス対立無】

(工藤 1995: 149)

- (4)² a. ポチが吠える／吠えた／吠えている／吠えていた。
b. ポチは毎朝吠える／吠えている。
c. 犬は吠える。

アスペクト対立が中和しているとされる(4b)のようなル形とテイル形の対立について、工藤(1982, 1995)はこれを「一時性」の対立と見ている。ル形に比べてテイル形は描かれる反復的な事態が一時的である場合に用いられる傾向が強いとするのである。

- (5) 太郎は最近ジョギングをしている／?する。

しかし、野田(2011)においてすでに指摘されているように、(6)のように長期的な期間限定の副詞が付いた例ではル形は許容されず、むしろテイル形しか許容されない。

- (6) a. 太郎は小学校の頃からジョギングをしている／*する。

- b. 太郎は30年前からタバコを吸っている／*吸う。 (野田 2011: 198)

本稿でも、ル形とテイル形の対立は一時性といった概念で捉えられるものではないと考える。本稿ではこの対立を、ル形とテイル形の状態性というアスペクト的意味の違いに伴う意味解釈プロセスの対立として捉えるため、以下では習慣文に関する意味論的な先行研究を概観する。

2.2 習慣文への意味論的アプローチ

習慣文に関して意味論的観点から形式的にアプローチする研究においては、量化され

た意味がどのようにして導かれるのかという点が問題にされてきたと言える。(7) のような顕在的な量化副詞が現れていない習慣文においても、usually、generallyに相当する GEN というデフォルトの演算子が非顕在的に存在していると考えられる点は、多くの研究者間で見解が一致している。

- (7) a. A bird flies.
- b. A dog barks.

一方で、習慣文における GEN がどのような変項を束縛するかという問題には 2 つの考え方が存在する。Heim (1982)、Diesing (1992) らの考えに従えば、GEN は個体変項を束縛するものである。総称文の分析において、恒常的な性質を表す個体レベル述語 (individual-level predicate; 以下 ILP) が用いられている (8a) のような例では、(8b) に見るように GEN は個体変項を束縛しているものとして考えることができる。

- (8) a. A dog is usually intelligent.
- b. GEN_x (dog (x)) [intelligent (x)]

これと同様に、習慣文においても GEN は個体変項を束縛するものだとすれば、(7a) は (9) のような意味表示で表されることになる。

- (9) GEN_x (bird (x)) [fly (x)]

しかし、本論文の主眼である習慣文と (8) のような文では用いられている述語が異なり、習慣文では語彙的には一時的な動作を表す場面レベル述語 (stage-level predicate; 以下 SLP) が用いられる。SLP と ILP の大きな違いはイベント変項の有無であり³ (Kratzer 1995)、GEN に対するもうひとつの考え方は、GEN がこのイベント変項を束縛するというものである⁴。Rooth (1995)、de Swart (1996) などの考え方に従えば、習慣文では (10) のような量化が行われていることになる。

- (10) GEN_e [$\exists x$ (bird (x) \wedge fly (x,e))]

しかし、これらの先行研究のいずれにも問題があるとして、Dobrovie-Sorin (2003) では新たな分析が提示されている。Dobrovie-Sorin は、習慣文を分析するのに GEN に加え HAB という 2 つ目の演算子を仮定しており、HAB は非状態述語のイベント変項⁵ を束縛して習慣相述語を返す単項演算子 (unary operator) であるが、GEN は個体の量化を表し個体と述部を表す命題をつなぐ関係演算子 (relational operator) であるとしている。

- (11) GEN_x (bird (x)) [HAB_e [fly (x,e)]]

このように 2 つの演算子を仮定する Dobrovie-Sorin (2003) の分析は、GEN の個体量化分析のみでは SLP のイベント変項が未量化のまま残ってしまう、という理論的な問題を克服するだけでなく、経験的にも利点が存在する。経験的な利点のひとつは、以下のような文の曖昧性を説明できることである。

- (12) A student rarely reads novels.
- a. 'few students reads novels.'
- b. 'in general, a student infrequently reads novels.' (Dobrovie-Sorin 2003: 30)

GEN の個体量化分析にせよ、イベント量化分析にせよ、演算子を 1 つのみ仮定する

分析では(12)の曖昧性を説明することはできないが、演算子を2つ立てる分析ではこれをスコープの曖昧性としてとらえることができる。

(13) a. FEW_x (student (x)) [HAB_e [read novels (x,e)]]

b. GEN_x (student (x)) [FEW_e [read novels (x,e)]]

ここまででは先行研究を概観し、習慣文の分析にとって重要と考えられる「個体の量化」と「イベントの量化」という意味論的な道具立てを導入した。

3. 習慣文におけるル形とテイル形の対立

本節では、日本語の習慣文においてル形とテイル形の対立が現れるいくつかの統語環境を観察し、ル形習慣文はDobrovie-Sorin (2003)の言うように量化副詞が「個体の量化」を行う文であり、それに対してテイル形習慣文は「イベントの量化」を行う文であると考えることで、それらの対立に説明が与えられることを見ていく。具体的には、主語からの数量詞遊離、副詞との共起関係、「ものだ」補文への生起、連体従属節への生起という、4つの統語的環境を見ていく。

3.1 主語からの数量詞遊離

ル形習慣文とテイル形習慣文は、(14)のような例においては一見同じような意味を表すように思われるが、主語から基数的な数量詞を遊離させることによってその対立を明らかにすることができる。

(14) a. 日本人は毎日お米を食べる。

b. 日本人は毎日お米を食べている。

(15)に見るように、テイル形習慣文の主語からは数量詞遊離が許されるが、ル形習慣文の主語からはこれが許されない。

(15) a. *日本人が3人毎日お米を食べる⁶。(cf. 3人の日本人が毎日お米を食べる。)

b. 日本人が3人毎日お米を食べている。

Ishii (1991)、Homma et al. (1991)らが指摘しているように、基数的な数量詞が遊離したホスト名詞が弱決定的な存在解釈のみが許される環境であるとすれば、(15)の対立はテイル形習慣文の主語には存在解釈が許されるのに対し、ル形習慣文の主語にはこれが許されないという事実を示していることになる。この点、ル形習慣文はILPを用いた文と非常によく似ている。ILPの主語からの数量詞遊離が許されないことは先行研究にも指摘があり(Harada 1976; Ishii 1991; 三原 1998他)、Ishii (1991)が論じているように、(16)において数量詞遊離が許されない事実は、ILPの主語は存在解釈を受けることができないというMilsark (1974)の一般化に従うものである。

(16) *子供が3人正直者だ。(cf. 3人の子供が正直者だ。)

ル形習慣文の主語がILPの主語と同じ解釈パターンを示す事実は、Dobrovie-Sorin (2003)が英語の単純現在形の習慣文において提案したように、日本語のル形習慣文においてもGENが個体変項を束縛すると考える必要があることを示している。

2.2節で見たように、ILPはイベント項を持たないため、(17)のような例においてGENは個体変項を束縛している可能性のみが考えられる。

(17) a. 子供は正直者だ。

b. GEN_x (children (x)) [honest (x)]

一方、テイル形習慣文の述語はSLPであるため、量化の演算子は個体変項とイベント項のいずれかを束縛する可能性がある。しかし、テイル形習慣文の主語が存在解釈を受けられる事実を捉えるためには、演算子が個体を直接束縛しているのではなく、まず個体が存在量化を受けるプロセスを介して量化が行われると考える必要がある。すなわち、テイル形習慣文に関しては、Rooth (1995) やde Swart (1996) のイベント量化分析のように、演算子がイベントを量化することによって、その中に含まれる個体も量化されるという関係を想定しなくてはならないのである。(18)に表されるように、テイル形習慣文では個体変項は存在閉包 (existential closure) によって存在量化を受け、そのような個体を含む形でイベント変項がREPEATという演算子に束縛されると考えられる⁷。演算子がGENでないのは、次節で見るとようにテイル形習慣文が表しているのがイベントの総称的な量化ではなく反復であることを表している。

(18) a. 日本人はお米を食べている。

b. $REPEAT_e [\exists_x (\text{Japanese } (x) \wedge \text{eat rice } (x,e))]$

ル形習慣文の述語もテイル形習慣文と同様にSLPであるが、主語が存在解釈を受けることができない事実はテイル形習慣文とは異なる量化が行われていることを示している。すなわち、イベント項が量化されているのではなく、ILPと同様に個体が直接量化されていることを考えなくてはならないのである。その際、Dobrovie-Sorin (2003) に従ってSLPのイベント変項を束縛して習慣相述語を返すHABという演算子を仮定すれば、述語がSLPでありながら個体量化が行われるという意味解釈のプロセスを考えることが可能になる。ル形習慣文の意味解釈は(19)のように表される。

(19) a. 日本人はお米を食べる。

b. $GEN_x (\text{Japanese } (x)) [\text{HAB}_e [\text{eat rice } (x,e)]]$

次節では、習慣相述語を形成するHAB演算子の働きとアスペクトとの関係について詳しく見ていく。

3.2 副詞との共起関係

本節では、副詞との共起関係を観察することを通して、前節で見たル形におけるHAB演算子の働きが非状態述語を状態述語にする働きであることを見ていく。

(20)に見るように、ル形習慣文、テイル形習慣文はともに頻度を表す副詞との共起が可能であり、その限りにおいては一見解釈にあまり差がないように思える。

(20) a. 日本人はお米を毎日食べる。

b. 日本人はお米を毎日食べている。

しかし、(21)に見るように、頻度副詞が顕在的に存在しない場合には違いが明らか

になる。未来時を指す読みを別にすれば、ル形は頻度副詞が顕在的に存在しない場合にも習慣的な読みしか存在しないのに対し、テイル形は頻度副詞がない場合には習慣的な読みと特定の進行中の出来事について述べる解釈で曖昧である。

- (21) a. 日本人はお米を食べる。
b. 日本人はお米を食べている。

このことから、テイル形習慣文における習慣の意味はテイル形をとることそのものから導かれるものではないのに対し、ル形習慣文における習慣の意味は、非状態述語がル形で現れることそれ自体によって導かれるものであると考えられる。本稿では、非状態述語がル形で現れた場合にはアスペクト強制 (coercion; de Swart 1998他) が起こるものとする。

述語のアスペクトに関する先行研究で指摘されているように、状態述語と非状態述語の違いはいくつかのテストによって確かめることができ、単純ル形で現在の意味を指すことができるか否かというテストはその一つである (金田一 1950、Vendler 1967他)。単純ル形で現在時を指すために状態性が必要であることは (22) に示される通りである。(22a) に見るように状態述語のル形は現在時を指すことができるが、非状態述語のル形は基本的に未来時を指し、(22b) に見るように「今現在」との共起は許されない。非状態述語が現在時を指すためには (22c) に見るようにテイル形を用いなくてはならない。

- (22) a. 今現在、日本人が部屋にいる。
b. *今現在、日本人がお米を食べる。
c. 今現在、日本人がお米を食べている。

しかし、Dowty (1979) でも指摘されているように、非状態述語の単純現在形が習慣の意味を表す場合には未来時でない解釈が可能となる。すなわちある種の状態的な解釈を得ることが可能になるということであり、この関係は非状態述語が強制により状態性を得るものと分析することができる。Dobrovie-Sorin (2003) の言い方に従えば、ここでの状態化とは、HABが非状態述語のイベント項を束縛して習慣相述語を返す操作であると捉えられる。このような強制の操作は非状態述語がル形で現れることそれ自体から導かれるのに対し、テイル形では習慣の意味は必須ではなく、HAB演算子の存在は仮定されない。本稿では、テイル形が表すのは「イベントの反復」であり、それが習慣として解釈されるのは、頻度副詞によって一定の周期性を持った繰り返しであることが示されることによると考える⁸。

さらに、ル形に起こる状態化について詳しく見ていくと、「昨日から」「一週間前から」といった期間限定の副詞との共起関係から、その状態性がどのようなものであるかが明らかになる。野田 (2011) は、(23) に見るようにル形習慣文は期間限定の副詞と共起することができないが、テイル形習慣文はこれが可能であることを指摘している。

- (23) 私は一昨年から毎朝、公園を走っています/*走ります。 (野田 2011: 206)

この事実を上述の議論とのつながりの中で捉え直せば、ル形における強制による状態

化は、一時的な状態性ではなく時間的限界のない恒常的な性質を表すものであるということになる。そのように考えることにより、主語からの数量詞遊離に関してル形習慣文がILPに近いふるまいを見せることも整合した説明が得られる。一方で強制による状態化が起こらないテイル形習慣文は、一定の周期性を持ったイベントの反復を意味しているために、期間限定が可能になっていると考えられる。そして、期間限定が可能になっている以上、イベントを量化する演算子は総称的なものではなく、REPEATのような単に反復的量化を表すものだと考える必要がある。次節では、状態述語化と個体量化との関係を、「ものだ」補文への生起を通して論じる。

3.3 「ものだ」補文

ここまでで観察してきたル形習慣文とテイル形習慣文の意味解釈の違いは、本稿の冒頭で指摘した「ものだ」補文への生起を考えることによってより明確になる。

以下の(24)に見るように、「ものだ」補文の主語には固有名詞は許されず、総称的に解釈される裸名詞でなくてはならない。

- (24) a. 子供は元気だ。
b. 太郎は元気だ。
(25) a. 子供は元気なものだ。
b. *太郎は元気なものだ。

裸名詞が用いられている(24a)においては「子供」の総称量化が行われるため、「ものだ」補文への生起が可能であると考えられる。しかし、固有名詞が用いられている(24b)においてはイベント量化は行われるが⁹、すでに個体は定項であるため個体の量化は行われない。このことから、「ものだ」補文の制約は以下のように考えられる。

- (26) 「ものだ」補文の主語は総称量化される個体変項でなければならない。

(26)が正しければ、ここまでで見てきたように個体の量化が行われるル形習慣文は「ものだ」補文へ生起できるが、イベントの量化が行われるテイル形習慣文は生起できないと予測される。そして、(27)に見るようにその予測は正しい。「ものだ」補文には、裸名詞主語を用いたル形習慣文は生起可能であるが、主語が裸名詞であってもテイル形習慣文の生起は許されない。

- (27) a. 日本人はお米を食べるものだ。
b. *日本人はお米を食べているものだ。

このことが意味するのは、(18)のようなテイル形習慣文では、定項を用いた(24b)と同様に個体の量化は行われず、イベントの量化のみが行われているということである。

- (28) 日本人はお米を食べている。

(28)においては、イベントの量化に伴いその参与者である主語も量化されることになるが、直接的な個体の量化は行われない。一方で、ル形習慣文は「ものだ」補文への生起が可能であることから、GENが個体を量化していることが分かる。

前節での議論を踏まえると、こうした個体の量化と述語の状態性との関係が明らかになる。(24a) のようなSLP形容詞やル形習慣文の裸名詞主語の総称量化が可能なのは、述語が状態性を持つためである。一方で、テイル形習慣文ではあくまでイベントの反復が表されるのみで状態化が起こらないため、主語が直接的に量化を受けることはできない。

ここまでで論じたル形習慣文とテイル形習慣文の違いは、述語のアスペクトとそれに伴う意味解釈メカニズムの違いという点から、以下のようにまとめることができる。

(29)

	状態性	量 化
ル形習慣文	非状態述語がアスペクト強制 (HAB 演算子) により状態化 (ILP化) する	個体量化 (裸名詞主語は総称解釈を受ける)
テイル形習慣文	強制による状態化は起こらず、非状態述語のまま	イベント量化 (裸名詞主語は存在解釈を受ける)

3.4 「恒常条件的関係」を表す連体従属節への生起

本節では、非状態述語のル形に状態化が起こるとするこれまでの議論を支持する現象として、同じような状態化が起こるとされている連体従属節の環境を見る。そして、「恒常条件的関係」を表す状態化が可能なのはル形のみであり、テイル形はこの環境に生起することができないことを指摘する。

石井・石川 (2010) では、次の (30) (31) のような連体従属節で「動作動詞の状態述語化」が起こることが論じられている。

(30) a. このレストランに来る人は必ずハンバーグを注文した。

b. 私は毎朝妻が丁寧にいれるコーヒーを飲んだ。 (大島 2008: 102,111)

(31) 健が勧める論文に指導教授は期待した。 (石井・石川 2010: 121)

(30) (31) のような例は、大島 (2008) が「恒常条件的関係」を表すとしているように、従属節事態が起こるごとに主節事態も起こることを表している。(30) の意味解釈は、石井・石川 (2010) において「インフォーマルな定式化」として (32) のように表されている。

(32) a. 【レストラン訪問】の人は、【ハンバーグ注文】でもあった。

b. 【妻がいれる】のコーヒーは、【話者が飲む】であった。

(石井・石川 2010: 116)

石井・石川 (2010) の主眼は、(30) (31) のような例の従属節時制の解釈が三原 (1992) の「視点の原理¹⁰」に従っていることを示すことである。(30) は本来、「視点の原理」の反例として大島 (2008) が挙げたものであり、大島 (2008) は (30) は従属節事態が主節事態よりも前であると解釈されるため、「視点の原理」に反すると主張している。しかし、石井・石川 (2010) はこのような例に「状態述語化」が起きている。

ると考えることによって「視点の制約」の反例とはならないことを主張した。ここで述べられている「動作動詞の状態述語化」とは、前節で述べた「アスペクト強制による状態化」と同じものを指していると考えられる。(30) (31) のような従属節に状態述語化が起きているのだとすれば、従属節のル形が表す時制は「現在」であり、主節事態は従属節事態と同時である。そして、これは「視点の原理」の予測に合致するものである。

本稿の観点から興味深いのは、このような連体従属節においてテイル形の生起が許されない点である。「恒常条件的関係」を表す連体従属節が習慣文と共通した性質を持つことは、(30b) (31) の連体従属節が(33a) (34a) のようにル形習慣文としてパラフレーズすることができることから確認できる¹¹。そして、(33b) (34b) は、パラフレーズとしてはテイル形習慣文もル形習慣文とほぼ同じ意味を表すことが可能であることを示している。

- (33) a. 妻はコーヒーを丁寧にいれる。
b. 妻はコーヒーを丁寧にいれている。
- (34) a. 健は指導教授に論文を勧める。
b. 健は指導教授に論文を勧めている。

しかし、(35) (36) の対立に見るように、「恒常条件的関係」を表す連体従属節にはテイル形は生起することができない。

- (35) a. 私は毎朝妻が丁寧にいれるコーヒーを飲んだ。(= (30b))
b. *私は毎朝妻が丁寧にいれているコーヒーを飲んだ。
- (36) a. 健が勧める論文に指導教授は期待した。(= (31))
b. *健が勧めている論文に指導教授は期待した。

上記の対立が意味しているのは、「恒常条件的関係」を表すための条件となる状態化が、ル形では行われるのに対してテイル形では行われえないということである。これは、「動作動詞の状態述語化」はル形の場合にのみ起こるものであるとする本稿の主張を支持する現象であると言える。「恒常条件的関係」を表すのにはル形の習慣におけるILP化が関与しており、テイル形は恒常的な性質ではなく時間軸の中に位置づけられるイベントの反復を表すため、このような環境に生起することができないものと考えられる。

4. 2種類のテイル形習慣文と状態性

ここまでの議論では、個体量化が行われるル形習慣文との対比の中で、テイル形習慣文をイベント量化が行われるものとして位置づけてきた。しかし、テイル形習慣文の中にも個体量化を行うものが存在する点には注意が必要である。本節では、継続相のテイルと反復相のテイルは状態性という観点から分けることができ、その状態性の違いによって異なる量化が行われることを論じる。

工藤(1995)でも指摘されているように、(37)に見るような動作継続／結果継続を表すテイル(継続相)は、これまで見てきたイベントの反復の意味を担うテイルとは異なる。そのため、(38)に見るように意味を変えることなくル形と言い換えることはで

きない。

- (37) a. 化石は地中深くに埋まっている。
b. 牛はいつ見ても草を食べている。
c. 犬の鼻は湿っている。
- (38) a.#化石は地中深くに埋まる。
b.#牛はいつ見ても草を食べる。
c.#犬の鼻は湿る。

継続相のテイル形習慣文は、(39a) に見るように、「毎日」のような頻度を表す量化副詞がつくことができない点でも、反復相のテイル形習慣文とは性質が異なる。一方で、(39b) は「たいてい」といった副詞とは共起が可能である。

- (39) a. *化石は毎日地中深くに埋まっている。
b. 化石はたいてい地中深くに埋まっている。

「毎日」「三日に一度」といった副詞と「たいてい」「常に」といった副詞の違いは、後者は非選択的束縛 (unselective binding) を行う副詞であるということである。Heim (1982) が論じているように、後者の副詞は個体変項とイベント変項のいずれを束縛することも可能である。(40a) における「たいてい」は、述語がILPであるため個体変項を束縛しているものと考えられるが、(40b) における「たいてい」は、主語が定項であるためイベント変項を束縛していると考えられる。

- (40) a. 学生はたいてい正直者だ。
b. 太郎はたいてい元気だ。

一方、「毎日」等の副詞は個体を束縛することはできず、イベント変項を束縛してその頻度を指定する働きのみを行う。

- (41) a. *学生は毎日正直者だ。
b. 太郎は毎日元気だ。

上記の現象からは、反復相のテイル形習慣文ではイベントの量化が行われるのに対し、継続相のテイル形習慣文では個体の量化が行われることが示唆される。

継続相のテイル形習慣文において個体の量化が行われているとすれば、「ものだ」文への生起が可能であることが予測される。そして、その予測は(42)に見るように正しい。

- (42) a. 化石は地中深くに埋まっているものだ。
b. 牛はいつ見ても草を食べているものだ。
c. 犬の鼻は湿っているものだ。

この事実は、「ものだ」補文で裸名詞主語が総称量化を受けるためには、述語が状態性でなければならないとする3.3節の議論とも整合する。この場合の継続相を表すテイルは、テイルまで含めた形で状態性述語になった上で、GENによる主語の総称量化が行われると考えられる。一方で、反復相のテイルは非状態性述語が繰り返されることのみを表しており、量化はテイルの意味によって行われる。この点で、継続相のテイル形

習慣文と反復相のテイル形習慣文は分けて考える必要があり、ル形習慣文と継続相のテイル形習慣文は同じく状態化されていると考えることができる。

ここまでで論じてきた述語のAspectと習慣文の意味解釈の関係は、以下のように整理できる。習慣文の意味解釈を捉えるためには、(43)に見るような語彙的Aspectと文法的Aspectの対立、そして文法的Aspectの中にも状態／非状態の対立があることを押さえておく必要がある。

$$(43) \text{ 語彙的Aspect } \begin{cases} [+stative] \\ [-stative] \end{cases} + \text{ 文法的Aspect } \begin{cases} [+stative] \\ [-stative] \end{cases}$$

文法的Aspectの[+stative]に位置するのがル形と継続相のテイル形であり、[-stative]に位置するのが反復相のテイル形である。量化のメカニズムにはこの状態性が大きく関わっており、[+stative]の素性を持つ述語のみが個体の量化を受けることができる。ル形習慣文は語彙的には非状態述語でありながら、テンス・Aspectを含んだレベルでは状態的であり、語彙的Aspectが[+stative]のILPに近いふるまいを見せる¹²。一方、テイル形習慣文には文法的な状態性の相違によって異なる2種類が存在する。反復相のテイルはイベントの繰り返しを表すのみで[-stative]であり、個体量化でなくイベント量化が行われるが、継続相のAspect的意味を担う状態性のテイル形が生起する習慣文は[+stative]であり、個体の量化が行われると言える。

5. まとめと今後の課題

本稿では、主語からの数量詞遊離、副詞との共起関係、「ものだ」補文への生起、連体従属節への生起といった現象から、一見同じような意味を表すル形習慣文とテイル形習慣文に意味解釈の相違が見られることを指摘し、その違いが量化のメカニズムの違いから導かれるものであることを論じた。また、ル形とテイル形になぜそのような違いが生まれるかという問題に関しては、非状態述語が状態化するAspect強制の有無から説明を与え、述語が状態的であれば個体の量化が行われるというように、状態性と量化メカニズムの間には相関関係が存在することを見た。上記の議論は、(44)のようにまとめることができる。

(44)

	状態性	量化
ル形習慣文	非状態述語がAspect強制 (HAB演算子) により状態化 (ILP化) する	個体量化
テイル形習慣文 (継続相)	継続相のテイルは非状態述語に状態性を与える	
テイル形習慣文 (反復相)	強制による状態化は起こらず、テイルはイベントの反復を表すので非状態述語のまま	イベント量化

本稿での議論は、これまであまり体系的な整理がなされてこなかった日本語の習慣文の特徴を、ル形とテイル形の対立から明らかにするものであり、日本語の文法研究に記述的に貢献するだけでなく、述語の語彙的性質とアスペクト形式の間の相関関係を明らかにする上でも大きな意味を持つものである。今後の発展の可能性としては、特徴づけ文 (characterizing sentence) と出来事文 (particular sentence) という文レベルの意味解釈に関わる対立に、アスペクト形式がどのような影響を与えているかを精緻化させる方向性が挙げられる。その際には、テイル形の他の用法との関わりの中で、今回の議論がどのように位置づけられるかを考える必要がある。また、アスペクトの形式に着目して意味解釈を論じる本稿の分析は、Diesing (1992) をはじめとした意味と統語構造を写像関係で捉えようとする試みと親和性が高い。本稿で得られたル形とテイル形の意味的相違が統語構造にどのように写像されるものであるか、主語の解釈の違いが統語構造にどのように反映されるのかといった問題を論じることは、今後の課題である。

注

1. 本研究は、平成28年度科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) (課題番号: 26・1188) の助成を受けたものであり、本発表はその成果の一部である。
2. 工藤 (1995) で実際に挙げられている例は (i) であるが、(ib) のような非対格動詞がイベントの反復を表す例は典型的ではないため、意図を損ねない範囲で動詞を変えたものを (4) に挙げた。
 - (i) a. 花子が死ぬ/死んだ/死んでいる/死んでいた。
 - b. この頃よく子供が事故で死ぬ/死んでいる。
 - c. 人は死ぬ。 (工藤 1995: 149)
3. HLPにもイベント項を認めるChierchia (1995) のような考え方もあるが、その場合にもHLPのイベント項は義務的にGENに束縛されるという規定が必要となる。こうしたSLPとILPの違いをどこに帰すかといった問題には今回は立ち入らず、両者の違いをイベント項の有無であると捉えるKratzer (1995) らの考え方に従う。ただし、本稿で論じるル形/テイル形習慣文の違いは特定の理論によらず捉えられるものと考えられ、他の定式化の可能性もある。
4. より弱い言い方としては、イベント変項と個体変項の両方を束縛する (multiple binding) とするChierchia (1995)、Krifka et al. (1995) などの分析もあるが、ここではRooth (1995)、de Swart (1996) に従い、イベント量化が行われる場合、GENは直接的/選択的にeventのみを量化するものとする。
5. 厳密には、Dobrovic-Sorin (2003) ではHABが束縛するのは時間変項であり、イベント変項と時間変項は区別すべき概念であるとされている。ただし、習慣文の分析にGENとHABという2つの演算子を立てるといった分析と、述語の項構造にイベント項や時間項を立てるべきかという問題は独立した問題であると考えられる。ここでは議論を簡潔にするため時間変項という概念は導入せず、HABはイベント変項を束縛するものとしておく。
6. ただし、条件節においてはル形習慣文においても数値詞遊離が可能になる。
 - (i) a. 日本人が3人毎日お米を食べると、食費がかさむ。
 - b. 日本人が3人毎日お米を食べれば、食費がかさむ。
 このことには、非実現 (irrealis) の環境であることが関係している可能性がある。
7. de Swart (1991) のイベント量化分析では、最終的に個体に総称的な量化が行われる操作はLFの中で示されておらず、イベントと個体の一対一の写像から語用論的推移が生まれるのみとされている。このような関係を形式的にどう表すかについては考察の余地がある。
8. 習慣としての解釈を支える要素としては、頻度副詞の他に文脈による影響も考えられる。
9. 「元気だ」のような形容詞は、状態述語であるがイベント項を持つSLPである。「元気だ」のイベント項が量化副詞によって束縛されることが可能であることは、4節の議論を参照されたい。状態/非状

態とILP/SLPという分類は完全に一致するものではないが相関があり、Fernald (2000) では全ての非状態述語はSLPであり、全てのILPは状態述語であると一般化されている。

10. (i) 視点の原理 (tense perspective) (三原 1992: 22)
 - a. 主節・従属節時制形式が同一時制形式の組み合わせとなる時、従属節時制形式は発話時視点によって決定される。
 - b. 主節・従属節時制形式が異なる時制形式の組み合わせとなる時、従属節時制形式は主節時視点によって決定される。
11. (30a) の例は、動作主が主名詞になっており習慣文にパラフレーズした時に「人」が総称解釈を受けて大きく意味が変わってしまうため、ここでの議論からは除く。
 - (i) a. #人はこのレストランに来る。
 - b. #人はこのレストランに来ている。
12. ただし、ル形習慣文とILPを用いた文は、頻度を表す量化副詞の共起など、語彙的アスペクトが関わるレベルの現象では区別されるべき特徴を持つ。GENとHABという2つの演算子を仮定するDobrovie-Sorin (2003) の分析は、語彙的には非状態述語を用いながら、文全体としては主語の恒常的性質を述べるル形習慣文の二面性を捉えたものだと言える。
 - (i) a. *ドイツ人は毎日背が高い。
 - b. ドイツ人は毎日ビールを飲む。

参考文献

- 石井創・石川潔 (2010) 「状態述語化と従属節時制の解釈」『日本語文法10 (2)』 pp.109-125, くろしお出版。
- 大島資生 (2008) 「連体修飾節と主節の時間的關係について」『日本語文法 8 (1)』 pp.101-117, くろしお出版。
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究15』 pp.48-56.[金田一春彦編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』 pp.5-26, むぎ書房 に再録]
- 工藤真由美 (1982) 「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌13 (9)』 pp.51-88。
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト：現代日本語の時間の表現』ひつじ書房。
- 野田高弘 (2011) 「現代日本語の習慣相と一時性」『東京大学言語学論集31』 pp.197-212。
- 三原健一 (1992) 「時制解釈と統語現象」くろしお出版。
- 三原健一 (1998) 「数量詞連結構文と「結果」の含意 (上) (中) (下)」『言語27 (6-8)』 pp.86-95, 94-102, 104-113, 大修館書店。
- Carlson, Gregory N. (1977) *Reference to kinds in English*. Ph.D. Dissertation, University of Massachusetts.
- Chierchia, Gennaro (1995) Individual-level predicates as inherent generic. In Carlson N. Gregory and Francis J. Pelletier (eds.) *The Generic Book*. pp.176-223. Chicago: University of Chicago Press.
- de Swart, Henriette (1996) (In)definites and genericity. In Makoto Kanazawa, Christopher J. Piñón & Henriette de Swart (eds.) *Quantifiers, Deduction and Context*. pp.171-194. Stanford: CSLI.
- de Swart, Henriette (1998) Aspect shift and coercion. *Natural Language and Linguistic Theory* 16. pp.347-385.
- Diesing, Molly (1992) *Indefinites*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Dobrovie-Sorin, Carmen (2003) Adverbs of Quantification and Genericity. In Claire Beyssade, Olivier Bonami, Patricia Cabredo Holherr and Francis Corblin (eds.) *Empirical Issues in Syntax and Semantics 4*. pp.27-44. Paris: Presses Universitaires de Paris Sorbonne.
- Dowty, David R. (1979) *Word Meaning and Montague Grammar: the Semantics of Verbs and Times in Generative Semantics and in Montague's PTQ*. Dordrecht: Teidel.
- Fernald, Theodore B. (2000) *Predicates and temporal arguments*. Oxford: Oxford University Press.
- Harada, Shin-ichi (1976) Quantifier float as a relational role. *Metropolitan Linguistics* 1. pp.44-49.
- Heim, Irene R. (1982) *The Semantics of definite and indefinite noun phrases*. Ph.D. Dissertation, University of Massachusetts.
- Homma, Shinsuke, Nobuhiro Kaga, Keiko Miyagawa, Kazue Takeda, and Koichi Takezawa (1991) *Semantic properties of the floated quantifier construction in Japanese, Proceedings of the 5th summer conference 1991*.

- pp.15-28. Tokyo linguistics forum.
- Ishij, Yasuo (1991) Operators and empty categories in Japanese. Ph.D. Dissertation, University of Connecticut.
- Kratzer, Angelika (1995) Stage and Individual Level Predicates. In Gregory Carlson and Francis Jeffrey Pelletier (eds.) *The Generic Book*. pp.125-175. Chicago: University of Chicago Press.
- Krifka, Manfred, Francis J. Pelletier, Greg N. Carlson, Alice ter Meulen, Gennaro Chierchia, and Godhead Link (1995) Genericity: an introduction. In Carlson N. Gregory and Francis J. Pelletier (eds.) *The Generic Book*. pp.1-124. Chicago: University of Chicago Press.
- Milsark, Gary L. (1974) *Existential sentences in English*. Ph.D. Dissertation, MIT.
- Rooth, Mats (1995) Indefinites, adverbs of quantification, and Focus Semantics. In Carlson N. Gregory and Francis J. Pelletier (eds.) *The Generic Book*. pp.265-299. Chicago: University of Chicago Press.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press.

(すずき あやか 筑波大学大学院 博士課程 人文社会科学研究科)